

<p>去る御札町 天野美奈子</p> <p>良くなれば退屈の来る病室に今宵はフジコ・ヘミングが来る 七月号・宇野 範子</p> <p>古の刺青<small>しせい</small>のごとき痕残るイヤホンをしたまま 安野ゆり子</p>	<p>「お」「め」「で」と「う」それぞれの字を保育士が抱えて朝の園庭を行く 佐久間得幸</p> <p>新しい手話届きたり都市封鎖社会的距離集団 八月号・東 由美</p> <p>感染 肅の字の筆順スマホで確かめるあまり使わぬ</p>	<p>漢字の一つ 森川 陽子</p> <p>鯨まで飲み込みさうな空白をもちて五年のひとりの生活<small>たつき</small> 植田 眞純</p>
---	---	---

毎月「心の花」誌を読むときは、校正の見落としがないかと文字中心に読んでしまいがちだったが、作品を選ぶという目的をもって読むことができて楽しい一年だった。担当した欄のなかで今月の15首や選歌ルームですでに評を得ている歌はのぞき、取り上げる作者は一度きりということにした。一月号から先月号まで一九七人の作者の作品を批評した。できるだけたくさん人の歌を紹介することができたと思う。作者の意図を離れた読みをしてしまったこともあったかもしれないが、取り上げた歌はどれも私がいいと思った歌ばかり。そこからさらに絞るのには迷いに迷ったが、技巧に工夫がみられる歌や発想に感心した歌を中心に三十首を選んだ。

今年六月号くらいから新型コロナウイルスにまつわる歌が激増した。経験したことのない事態に直面したのだから当然だろう。未知のウイルスへの不安、マスクの欠乏、自粛生活、ソーシャルディスタンス、リモートワーク、オンライン授業。同じテーマを扱って類型的に感じられる作品もあったが、「今」を詠うことの大切さ、短歌の記録性ということを考えさせられた一年もあった。秀歌として単独で取り上げにくくても「心の花」に残る一首一首の集積が、社会のありようを映し出す価値を持つのではないかと思う。私たちが新型コロナウイルスにどのように対峙したのか、この年の「心の花」誌を届けば見えてくるものがあるのではないだろうか。

- 非常事態にも関係各位の努力で欠号なく「心の花」が発行され、その時どきの心の動きを詠んだ歌が残ったこと。それをこの一年の何よりの収穫と考えたい。
- 最後に九月号から印象に残った歌を。
- ・通学バス曲がりくねつた坂をゆく長方形のひかりを曳きて 松元 雅子
 - ・不機嫌な鼠ひしめく雲の群れああもう梅雨の匂ひがしてゐる 関沢由紀子
 - ・日の暮れの亀の子束子谷中店大中小の甲羅ならびぬ 福原 美江
 - ・英文も混じる短冊ゆれゆれて無人の駅の笹竹飾り 松田 英美
 - ・あやふやな栞のページをめくるように黙って酌みあう悪友とわれ 石田 郁男
- 一年間ありがとうございました。